

天文学とプラネタリウム

第116回



www.tenpla.net

1年前の本稿で、TOKYO DESIGNERS WEEK (TDW) で企画されたドーム映像トークショーのことを紹介しましたが、今年もまた10月末にTDWに行ってきました。国立天文台4次元デジタル宇宙プロジェクトによる天文シミュレーションの投影、オーロラや打ち上げ花火の全天映像、DNAからタンパク質を組み立てる「セントラルドグマ」を描いたCG映像などが上映されるなか、今回は同じく特設ドームで開催された“J-WAVE × TDW2013 DAY DREAM DISCO”を観覧。DJによる音楽のプレイとドーム映像のVJを合わせたものでした。クラブ（発音注意）とかに行ったことのない私としては音楽がどうだかよくわかりませんが、映像としては「ああ、これはドームだからこそできるな」というものもあればそうでないと思えるものも。天文業界においてはドーム空間はプラネタリウムおなじみですが、それ以外ではそれほどメジャーではありません。ドーム球場で行われるライブで天井に映像を投影するか、教会のドーム状の天井にフレスコ画が描かれているくらいでしょうか。プロジェクトの輝度も上がり、ドーム映像を作っ



高梨直絢 (東京大学)
平松正顕 (国立天文台チリ観測所)

今月のお題

ドーム/全球映像の可能性、再び

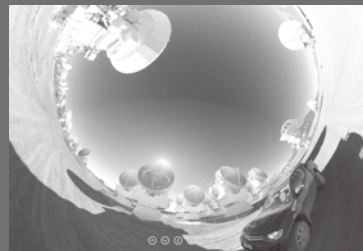


TOKYO DESIGNERS WEEKでのドーム体験とRICOH THETAによるお手軽全球撮影。この空間と技術、どう活かす？

て動かすコンピュータもパワフルになってきた今、次はどんな展開があるんでしょう。と思っていた矢先、お手軽に全球撮影ができてしまうカメラ RICOH THETA が発売に。これまでもデジタルカメラをいろんな方向に向けて写真を撮って、あとから合成すれば全球写真は作れましたが、シャッターボタンを一回押して専用ソフトに転送するだけで全球写真ができるのは画期的です。iOS アプリを使えば遠隔撮影もできます。というわけで早速購入。

テスト撮影してみた分かったことは、「まさに今この瞬間が全部切り取れる」ということ。写真なんだから当たり前という気もしますが、全球撮影なので物陰に隠れない限りは撮影者まで写る、というところが肝。これによって「撮影者も含めたまわりの空間が保存される」という印象がとても強くなるのです。これはちょっとカルチャーショックを受けるレベル。いろいろな使い道がありそうです。

ちょうどチリ出張が入ったので、THETA もお伴に連れてきました（正確には、出張が決まっていたから発売直後に購入）。メディア対応の仕事の合間なので十分吟味する時間が取れていま



アルマ望遠鏡山麓施設でのTHETA撮影画像。グリグリ動かせる画像はALMA twitter @ALMA_Japanで。

せんが、こういう忙しい時にこそお手軽撮影できる真価が発揮されるというもの。数十 km にわたって続く直線道路、標高 5000m のアンテナの林の中など、いくつか撮影を続けています。画素数があまりないので全画面表示にすると解像度がやや不足だったり、ものすごく明るいとこりや少し暗いところではノイズが目立ってしまったりと不満点もいくつかありますが、現状でも十分新しい世界を切り拓いてくれそうです。大きなドームに投影するには解像度の向上が必要ですが、コンテンツ提供の側からの新しい大きなうねりが期待できそうです。